

同 志 社 大 学

2016 年度 個人研究費研究経過・成果報告書

2017 年 3 月 2 日提出

所 属	職 名	氏 名
歴史資料館	准教授	若林邦彦
研 究 題 目	「木津川・淀川流域における弥生～古墳時代集落・墳墓の動態に関する研究」	
研 究 成 果 の 概 要	<p>本年度の研究作業は、おもに木津川・淀川流域地方の弥生～古墳時代集落・墳墓に関して以下の 2 点についての分析作業を行った。</p> <ol style="list-style-type: none">1. 淀川右岸・左岸における、弥生・古墳時代集落発掘調査データの集成2. 詳細な墳丘形態・時期が不明な古墳について、現地調査により測量図を作成すること <p>結果として、淀川・木津川水系（京都盆地含む）の、集落と墳墓の分布の変遷をみると、そこには小地域ごとの差異とともに重要な共通性がある。その共通性は以下の 5 点である。</p> <p>(a) 弥生時代～古墳時代にかけて集落立地地点の中心が、三角州堆積環境などの低湿地から、扇状地中下部や低中位段丘上へと変化する。弥生時代に低湿地での集落形成が多い理由としては、水田可耕地に隣接して居住地を設ける状況、つまり個々の集落に付帯して水田経営がなされることが多いことを示している。古墳時代にはそういった経営の個別性が変質する可能性が高い。</p> <p>(b) この変化の進行は、沖積地面積の少ない地域（淀川左岸・木津川流域）では早い段階（古墳時代前期）に進行するが、低湿地集落数の減少が明確になる時期は古墳時代中期である。</p> <p>(c) 上記の集落分布の変化はみられるものの、大規模墳墓造営の有無にはかかわらず、弥生～古墳時代を通じて各小河川流域に集落群そのものは存在し続ける。古墳時代中期の大規模墳墓の集中の目立つ地域にだけ人口集中が認められるわけではない。</p> <p>(d) 古墳時代中期には、地域によっては鍛冶生産や埴輪工房などの専門的集落の存在が確認されはじめる。それは、古墳時代中後期に大規模墳墓を造営する領域に近い場所であることが多い。</p> <p>(e) 地域によっては、古墳時代後期あるいは古代には集落分布の高燥地への集中傾向は若干緩和され、低湿地集落の数は増加し始める。同時に、中小河川流域ごとに背後の丘陵部に群集墳を形成し、その内容に小地域間の大きな階層的差異はみとめにくい。</p> <p>古墳の諸要素を通じて集団間の政治的関係とその変化を論じることは、古墳のある時代としての古墳時代を考察する上で不可避な態度だとは感じる。しかし、他の社会変化の質を考慮せずにその議論を進めても、結局「政治とは何か」についての理解は進まず、結果として墳墓・古墳研究は人文社会科学に貢献することはできない。本研究の目的は、政治だけでなく社会要素の復権のための試みとして提示した。</p>	